



脳神経内科 医長
笠原 壮
かさばら そう

きょうは
脳神経内科
です



こんにちは
診察室です。

アルツハイマー病の 最近の治療

「ここから」は診察室です。のバックナンバーをご覧ください。



はじめに

テレビなどの報道でご承知の方もおられるかと思いますが、レカネマブ（商品名：レケンビ）というアルツハイマー病に対する治療薬が日本でも使用可能となりました。2023年9月25日に承認されたばかりの「アルツハイマー病」の新薬ですが、「認知症の新しい薬」として紹介されていることが多いようです。今回はこのお薬について、紹介させていただきます。と思います。

アルツハイマー病とは

まず、アルツハイマー病について説明いたします。アルツハイマー病は、何らかの理由で脳や脊髄の神経細胞が失われてしまう「神経変性疾患」と呼ばれるグループの疾患です。特にアルツハイマー病は認知症の原因となり、アミロイドベータというタンパク質が、異常に脳内に蓄積することが一つの要因と考えられています。そのほかにも神経細胞内でのタンパク質の変化もあるため、アミロイドベータだけの病気ではないとは考えられています。また、アミロイドベータの蓄積と病気の発症とのつながりはまだまだ未解明な部分も多い状況ですが、アミ

ロイドベータは病気にかかわる重要なタンパク質ではあると言えます。これらはいわば病気で減ってしまった、残っている神経細胞の働きを助けるような作用であり、認知症の症状を軽くする効果を期待するものです。いわば対症療法のお薬といえるかもしれません。当然効果のなかかなかたしい方もおられますし、進行を抑えることはできません。認知症を治す治療でもありません。

認知症治療薬について

アルツハイマー病は、認知症の原因となる神経変性疾患ですが、今回紹介するレカネマブが登場するまでにも、認知症治療薬はありました。

それは、神経変性により脳の働きが低下したことによっておきる症状に対処することを目的としたお薬で、大きく分けるとコリンエステラーゼ阻害薬、NMDA受容体拮抗薬という種類があります。

認知症の新しい薬レカネマブとは

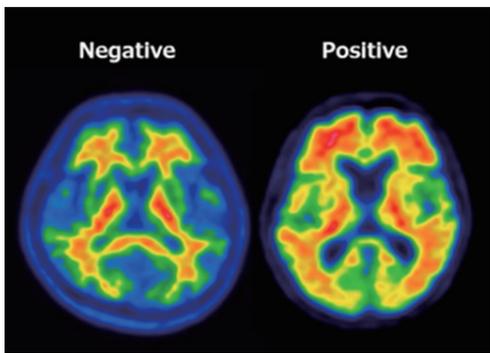
そのような中、アルツハイマー病の病状そのものへの治療方法が研究され、特にアルツハイマー病

院して注射を受けていただくこととなります。

抗体医薬というお薬に多い特徴として、アナフィラキシーなどアレルギー反応に注意が必要ですが、さらには、ARIAと呼ばれる頭部MRI上の画像異常が合併症として生じます。脳の浮腫や出血などが生じ、結果として麻痺など何らかの症状を起こすようなARIAはまれとはされますが、ARIA全体では患者さんの6人に1人ほどに発生するとされます。

レカネマブの治療効果について

「18カ月の治療で症状悪化を27%抑制できた」との結果が示されています。このお薬も、やはり完治できる治療ではなく、アルツハイマー病としての病状は進行してしましますが、その治療によって進行が遅くなる可能性が示されています。しかし、注意しないといけないのが研究の結果の中では、認知症の病状を示すCDRという



アミロイドPET検査の画像
アルツハイマー病の患者さんの画像(右)では健常の方(左)に比べ、脳のアミロイドベータの存在を反映して、画像の赤みが増強していることがわかります。(日本メジフィジックス株式会社のWebサイトから引用)

アルツハイマー病治療薬「レカネマブ」の仕組み

- ① アルツハイマー病ではアミロイドが脳のニューロンの周りに集まる
- ② 「レカネマブ」の抗体がアミロイドに付着する
- ③ 抗体が免疫細胞を引き寄せ、アミロイドを破壊させる
- ④ ニューロン周辺のアミロイドが減る

出典:BBCリサーチ

レカネマブを扱った報道のイラストから引用

おわりに

一口に認知症といっても患者さんは、その症状や生活状況などがそれぞれに異なり

「アルツハイマー病の治療」についてご説明します。